

M. シュレットティンガー  
「アルファベット順名称目録作成の手引き」

Handbuch der Bibliothek-Wissenschaft, … / Martin Schrettinger. – Wien :  
Fr. Beckschen Universitaets-Buchhandlung, 1834 SS. 43-85  
Zweiter Theil : Anleitung zur Verfertigung eines alphabetischen Namen-Kataloges.

石田俊郎 訳

はじめに

バイエルン宮廷図書館のシュレットティンガー (Martin Schrettinger, 1772-1851) は、200年前に世界で初めて「図書館学 (Bibliothek-Wissenschaft)」という語を用い、さらに初めて図書館学の教科書『図書館学教科書試論 (Versuch eines vollstaendigen Lehrbuchs der Bibliothek-Wissenschaft)』を著わした人物である。

シュレットティンガーは、以前、まだ学生であったエーベルトの著作の書評をし、その後文通もあって、自分を尊敬しているかに見えた19歳年下のドレスデン王立図書館長エーベルト (Friedrich Adolf Ebert, 1791-1834) から、『教科書試論』の出版から10年も経った1821年4月、突然、『イエナ一般学芸新聞』で厳しい批判を受けた。シュレットティンガーは反論を出版し、第4分冊の出版を急ぐが、業務の多忙さのほかに出版社の不手際等も重なり、結局、初版 (第1分冊～第3分冊) の出版から第4分冊の出版までに20年を要している。この完了したセットに対して、今度は、エーベルトの友人であるデンマークの王立図書館主任司書モールベック (Christian Molbeck, 1783-1857) がさらに批判を加えた。これが有名な『教科書試論』論争である。

二人は非難はしながらも、この『教科書試論』の優れた部分は認めており、エーベルトは、「実務経験による純金の粒を多く含んでいる…これから学ぶところが多かった」と彼の著書『司書の自己修練』の注に書いているし、モールベックは、『教科書試論』第2分冊中の「アルファベット目録の作成に関する規則」について、「極めてすぐれたものである」「多くの優れた、基礎的な専門知識に基づくコメントや有益な示唆が含まれている」と、1829年に出版した著書『公開図書館・図書館員・図書館学』の「付録1」で述べている。

そして、1834年、シュレットティンガーは自己の図書館学の集大成として『図書館学ハンドブック』を出版した。その第2部「アルファベット順名称目録作成の手引き」が、この二人の批判者も評価していた、この目録法の最終版である。

当時は、コンピュータは勿論、複写機や謄写版さえも存在せず、全ての作業が手書きで行われた時代であることを念頭において読んでいただきたい。

[図書館学ハンドブック 第2部]

2 アルファベット順名称目録作成の手引き<sup>1)</sup>

2.1 タイトル写票 (Titel-Kopien)<sup>2)</sup>

2.1.1 タイトル写票の決定とその特性

タイトル写票を決定するための様々な必要事項については、その作成の際に、種々の配慮がなされることが不可欠となる。つまり、

I) タイトル写票は、その中の一枚を使って、その写票に対応した本を図書館の中から迷うことなく探し出せるものでなければならない。

II) タイトル写票は、次の中の最も適切な方法で排列される。

a) アルファベット順 (排列語等の)

b) 分類順

c) 地理・年代順

また、それぞれのタイトル写票は、

A. 次のような基本的な構成要素を備えていなければならない。

I. 本そのものを排列 (排架) するための指標 (目印)、すなわち、

1) その本が属する専門分野の主題名 (Inscription)<sup>3)</sup>

2) 版型の表示

3) その本の整理番号

II. 種々の目録のためのタイトル写票の排列指標

1) 排列語 (著者名、書名中のキーワード) のアルファベット順

2) その作品の完全な書名 (あるいは、有効な短縮形) のアルファベット順

III. 版の指標 (出版事項)

1) 印刷地名

2) 印刷者名、あるいは、発行者名

3) 発行年、そしてインキュナブラ (初期印刷本) の場合やそのほか、

それが重要となる場合には、月日、等も。

B. これらの構成要素は、それぞれタイトル写票上の決められた、最も適切な位置に記載されねばならない。これにより、その写票を取り扱う際に、一見しただけで注意を引くことになる。

また、書名の筆写に取りかかる前に、四つ折り版か、八つ折り版の用紙のストック [塊り] を準備して、(付録図版B—Kの方法で) 用紙に2本の垂直の線を引き、これらを横断する1本の水平の線を引くと6個の異なるスペースが区分されてできる。そこから常に書き始めるのである。

第1のスペースには、その本の整理番号を記入する

第2のスペースには、図書館分類の主題名

第3のスペースには、版型

第4のスペースには、排列語

第5のスペースには、その作品の書名

第6のスペースには、印刷地、印刷者、または、発行者、ならびに、発行年。そして、この下の少し離れたところに必要があれば注記 (Bemerkungen) を記入する。

2.1.2 作成の一般原則

目的にかなったタイトル写票であるための主たる要件

I. 精確、かつ

II. 完璧であること。

2.1.2. I

書名は精確に写し取られねばならない。それによって、タイトル写票を一見しただけで、

A) ほとんど同じ書名をもつ様々な作品や

B) 同じ作品の様々な版、複製、等を、本

を手に取っているかのごとく正確に識別できる。また、

- 1) 言語、
- 2) 正書法 [による語の正しい綴り方]、  
そして、ある程度は
- 3) さらに、文字の様式まで原典そのままの精確さを保持しなければならない。

- 1) ある本の書名を、
  - a) 少し短縮するために、別の言語に翻訳したり、
  - b) 同じ言語ではあるが、別の言葉を使って短縮したり、わかりやすく表現したいと考えてはいけない。

詳しく言えば、およそ全ての作品がヨーロッパの言語によるものであり、その本来の書名の前にはラテン語による書名が置かれている。また、作品の書かれている言語による書名は、たいへん冗長で理解しにくい表現なので、これを一語か、数語による自分で選んだラテン語や誰にでも理解できる別の言葉で表現することがある。このような方法で書き写す人は、しばしば大いに労力と時間を省くことができるが、その目録の信頼性は失われてしまう。このためその作品が本当にこの書名をもっているのか、否かを確認できるタイトル写票が存在しないことになる。——そしてさらに憂うべきは、そのように変更された書名を、使用されている本来の排列語では、アルファベット順名称目録では探すことさえできないということである。

注. 冗長な書名が、どのように適切に短縮化されたり、理解不能になったり、あるいは、見違えるほど修正されることがあるかについては、さらに後半で提示する。

- 2) また、タイトルページの正書法については、直ちに目に付くような不完全さが

あったとしても、これを修正してはいけない。何故ならば、これは正にそれによって発行年、版、あるいは何か、その作品に特徴的なものを示しているからである。——それゆえにまた、本当の語法上の間違いも、それらは著者によるものかもしれないし、植字工に起因するものかもしれないが、修正するのではなくて、これは筆写する人の過失から起こったものではないことを、その時に、ただ (sic [原文のまま]) を付け加えることによって示唆する。

- 3) 同じ理由から、文字の様式も終始、継続されねばならない。書名全体や書名の中の個々の語についても、例えば、ギリシャ語、ヘブライ語等の文字、あるいは、ドイツ文字で印刷されているものを、ラテン語の文字で書き写してはいけない。あるいは反対に、ラテン語文字を用いてドイツ語で印刷された書名を書き写す際に、ドイツ語の文字に入れ替えてはいけない。

注. a) ドイツ文字とイタリック体、あるいは、大文字と小文字の違いを見極めたいという気持ちは無駄で笑うべき苦勞であるとともに、煩わしく、時間の無駄となるであろう。

b) ゴート文字は一貫して、ドイツ文字で書き写すことが可能である。というのは、それらはほとんどが、お互いに類似のものだからである。

c) 手書き文字 (Schriftlettern) で印刷された本、あるいは、銅版に彫られたものがある場合には、ステロ版製版と同様に、タイトル写票の発行年の少し下に、簡潔に注記することになる。

2.1.2.Ⅱ

タイトル写票は、これによって、そこから可能な限り多くの、その本の内容の本当の意図や性質を知ることができるし、続いて行われる件名目録 (Real-Kataloge)<sup>4)</sup> や専門目録 (Spezial-Kataloge)<sup>5)</sup> の作成が、たいへん容易になるので、タイトル写票は完全でなければならない。タイトル写票のこの完全性は、作品の書名全体を一語一語書き写すか、少なくとも、ちょっとした一語さえも漏らさないことにかかっている。このことは、その作品の本当の性質をより詳しく決定することに貢献することになる。

注. A) 役に立たない冗長な書名の多くが短縮できるし、また、そうしたほうがよい。しかしそれは、慎重にやらねばならない。無駄な肩書やまた別の不必要な冗長さのある個所は省略し、---の記号を使って目立つようにする。付録図版Bは、あまりに冗長な書名をこの方法で短縮化した一つの例である。

B) それに対して、時には書名があまりに短くて、曖昧であるか、あるいは、心を迷わすようなもので、そこから内容の性質を全く言い当てることができないうか、そのために騙されるにちがいないようなものがある。そんな場合には、本当の内容を (いづれにしても、その本を分類するために究明しなければならないが) 発行年の下か、または、書名そのもの下に ( ) に入れて、簡潔に表示すべきである。例えば、付録図版Iのように。

ある作品を正しく理解するために、した

がって完全なタイトル写票の作成のために、特に役に立つものとしては、

A) 著者、発行者、翻訳者、注釈者の姓のほかに、その名、あるいは洗礼名、および、父の名を採った名<sup>\*</sup>)。詳しく言えば、それらは昔から本のタイトルページ上に挙げられてきたものである<sup>\*\*)</sup>。

\* ) 同じ姓や洗礼名をもった著述家が、二人、あるいは、それ以上存在することも珍しいことではなく、その上さらに、同じ学問を扱っていることも時々あるので (少なくとも、この場合は) そうすることは、たいへん良いことである。というより、必須のことである。また、そのような著述家が挙げている身分や職業といった、その人の肩書も、お互いに取り違えたり、混同したりすることのないように無視してはいけない。

\*\* ) このような制約は、これに続く全ての個所でも前提条件となる。というのは、さもないければ、これに続く目録業務を中断させることになるような調査を行なわねばならぬことになるからである。

B) 本に含まれているもの全ての、簡潔な一定の表示、すなわち

- 1) その本で扱われている主題
- 2) 翻訳、注釈、序言、これらの中には個々の論文として考察されるべきものもあれば、オリジナル・テキストを添えたものもある。あるいは逆に、翻訳付き、あるいは、注釈付きで印刷されたオリジナル・テキストもある。

- 3) 主たる作品のほかに論文等と一緒に印刷されているもの
- 4) 銅版印刷、木版印刷、地図、諸表、楽譜、等
- C) 珍しい事情についての報告、あるいは文学史の解明に役立つような逸話など。例えば、寓話のラテン語訳である“Reinike Fuchs (ライネケ狐)”(付録図版 B) は、次のラテン語“inaudito et plane novo more”と同じものである。このことから、16世紀の中期以降でもまだ、ドイツ語の本をラテン語に翻訳するといった、全く信じられないような企てがあったことを取り上げることができる。
- D) 部 (Theile) や巻 (Baende) についての表示は、タイトルページ上に記されているものも、背表紙上に記されているものも記述する。それらが合冊製本されているものか、個別に製本されているものかも記述する。(付録図版 C と I を見よ)
- E) 何版
- F) 印刷地、発行者、印刷者、発行年および版型は、ある作品の様々な版についての最高の識別指標である。

### 2.1.3 参照 (Rueckweise)<sup>6)</sup>

多くの作品が、まことに当然のことながら、二つ、時にはもっと多くの排列語を使って、アルファベット順名称目録で検索される。そのような作品の迅速な発見のためには、参照(付録図版 D) が不可欠である。しかし、再三再四の検索を省き、直ちに参照を使って、直接、本そのものを示すために、参照の用紙にも常にその本の整理番号、専門分野を示す主題名および版型を表示しておくという、わずかの努力をすることは値打ちのあることで

ある。

これは同じく、その作品の特別な構成要素や付録の紹介についても有効であり、付録図版 F や G にそれを見ることができる。

## 2.2 特別な処理に関する規則

### 2.2.1 巻数について

1) 巻数は、決まった位置に極めて明瞭に記述されねばならない。というのは、巻数が曖昧に、あるいは、完全に間違っただけで記述された場合、それらの本の発見が、たいへん困難になることがあるからである。

2) 小冊子のタイトル写票を作成する場合、何冊かの小冊子が1巻に合冊製本されることもあれば、あるいは、1個のケース(函)と一緒に納められていることもあるが、そのタイトル写票と一致する巻やケースに、何冊の小冊子が含まれているかを示す数字を、その巻の巻数やケース番号に添えて、かっこ( )に入れて記載しなければならない。

### 2.2.2 主題名(標題)について

後から追加して合冊製本された作品では、タイトル写票上には常に、たとえ追加分が内容的には別の専門分野に属するものであっても、先に製本されていた作品の主題を表す主題名が記載されている。というのは、ここでは、ある作品が学問体系上、どこに関係しているかではなく、どこで見つけ出すことができるかが大事なのである。しかし、タイトル写票は、将来、個々の専門分野に関する「専門目録」の作成にも必要とされることがあるので、そのようなタイトル写票には主題別配置表 (Aufstellungs-Faches) の主題名(標

題)の下に、かっこ ( ) に入れて、各主題の名称(時にはたくさんの主題になることがある)を、詳しく言えば、最後のところに、内容に応じて、その小冊子が配置されるのにふさわしい主題部門を小文字か赤インクで記入することで、専門目録作成という目的にとっても、たいへん有益な下準備となるであろう。

### 2.2.3 版型表示について

1) 図書館の整備を複雑にしないように三つの版型のみを採用する。そのため排架の際には、全ての12折り判と、さらに小さな本は単純に八つ折り判のもとに組み入れられる。またタイトル写票上でも、版型表示の記号、8°が採用されることになる。

2) しかし、かなりの数の本を扱う場合には、タイトル写票には、排架用の版型のみを表示しているとの誤解を与える原因ともなり得るので、そのような場合には、その版型表示の下に、その本の本当の版型をかっこ ( ) に入れて記入する。

例えば、横長フォリオ判の場合:

4°                                  あるいは、4°  
(Fol. obl.)                                  ( 〇 )

横長四つ折り判の場合:

8°                                  8°  
(4° obl.)                                  ( ㌹ )

同様に、そのような本については、それより大きな版型の白紙を間紙として挿入して製本するか、あるいは、その本より大きな版型の別の本と合冊製本をする。

例えば、                                  4°  
  ( 8° )          あるいは、  
Fol.                                  あるいは、Fol.  
( 4° )                                  ( 8° )

注. フォリオ判の場合、これら以外に、簡潔で、類似の方法として、2°で表現することもできる。

### 2.3 アルファベット順排列語 (alphabetisches Ordnungswort)

排列語によって、それぞれの書名がアルファベット順排列の中で、しかるべき位置を指定されねばならない。したがって、一冊一冊の本は、アルファベット順名称目録において、という条件でのみ探し出せることになり、正しい排列語だけが検索を行い得るために、

- A. 排列語の選択、および
- B. これらの排列語の取り扱い方が、最も重要であることについては、議論の余地はない。また、ほとんど際限のない多種多様な書名の場合、経験のある図書館員でさえも当惑させられるような、たくさんの曖昧な事例もあるので、これらについては、次のことを試みてみたい。

- 1) 一般的な原則を確立すること。次にそこから
- 2) 曖昧な場合のための、明確な対応ルールを導き出すこと。

#### 2.3.A 排列語の選択

##### 2.3.A.1 一般的な原則

書名の中の各語は、常に排列語になり得るが、他の語よりもとりわけ書名そのものを代表するのに適した語が取り出されねばならない。

##### 2.3.A.2 一般的な規則

I. アルファベット順書名目録(alphabetischen Titel-Verzeichnisse)では、ある作品で論じられているテーマについては全く考慮さ

れていない。しかし、書名がしばしば、そのテーマを表わしているか否かについては、

- A) 全く表現していないか、
- B) 次のように、他の言葉で表現されているか、である。その中には、
  - 1) 決め手となる用語を全く含んでいないか、
  - 2) 決め手となる用語をたくさん含んでいるか、である。結局のところ、
- C) しばしば同じような主題語で表現される、その同義語があまりに様々であるために、テーマの根拠となる用語はたいへん不確実なものである。

アルファベット順名称目録で一冊の本を探したいときに、そのつど予期せぬ方法で選ばれ、記載されている根拠となる用語を如何にして察知することが可能か、ということこそが、確実な規則を定めることを不可能にしているのではないか？ ——そのような不確実性や不一致の迷路を避けるためにも書名のアルファベット順排列では信頼できる規則に従って確実な言葉が採用されねばならない。

II. これに加えて、タイトルページ上に実際に存在する言葉だけが、排列語としてふさわしいものである。厳密に言えば、次のような順序に従うことになる。

- 1) とりわけ、著者の姓以外のもの。また、それが無い場合には、
- 2) 著者の代理人と見なされ得る人物、すなわち、編集者、翻訳者、等の姓。しかし、作者不詳の書名の場合には、
- 3) 主格で表現された最初の主たる名詞類。あるいは、書名全体の中に、これらが存在しない場合には、
- 4) 変化格の形で表現されてはいるが、主格と同じ扱いがなされ得るような主たる

名詞類。そしてさらに、実際の書名<sup>\*)</sup>が、主たる名詞類を全く含んでいない場合には、次の順序になる。

\*) なお、実際の書名に、いわば説明の如く別の書名が添えられている場合にはたいてい、そのつなぎのところに oder (あるいは)、d. i. (すなわち) 等、といった言葉で、最初の書名との関連付けがなされている。そして、この中に著者や代理人の名前と同じものが存在する場合にのみ、後の書名から排列語を採ることができる。そうでない場合には、最初の書名が排列語を提供する権利をもつことになる。例えば、次の書名では、“Wie wird man schoen ? und wie bleibt man schoen ? Schoenheitsmittel fuer Damen und Herren.”

排列語として採用されるのは、説明的な書名から採った主たる名詞“Schoenheitsmittel (美容術)”ではなく、実際の書名から採られた形容詞の“schoen (美しい)”である。というのは、この語は主たる名詞類の立場を代行するものであるからである。その理由は、同様に、“Wie wird man eine Schoenheit ?” あるいは、“Wie erlangt man eine Schoenheit ?” とも言えるからである。

とにかく、探し出す手間を大いに省くためには、説明的な書名の中のあのような名詞類を排列語として採ることは、とても良いことである。最も簡単に覚えられる普通の方法としては、実際の排列語から参照を作れば、それを

使って本を探することができる。しかし、規準に則った排列語というものは、次の理由で採用されない。つまり、排列語の決定そのものが、主観的な見方の違いによって、大いに左右されるために、確実な規準といったものが、存在し得ないのである。

5) 主たる名詞の代わりをしている形容詞、代名詞、副詞、あるいは、動詞、そしてまた、これらのものが全くない場合には、

6) 書名の一番最初の語、による。

7) 本、論文 (Abtheilung)、手紙、書籍 (Liber)、小冊子 (Tractatus)、書簡 (Epistola)、等のように、時に作品の一区分を示すような主たる名詞は、それらが上述の性質を示していない場合、すなわち、それらが関連付けるような数詞を伴っていない場合だけ、排列語として選んでもよい。

Ⅲ. 排列語の選択については、上述した順に例を挙げる。

1) 書名の場合、“Matthissons Gedichte”の排列語は、“Matthisson”である。

2) “Wiener Musenalmanach auf das Jahr 1802. Herausgegeben von J. Liebel.”の排列語は、“Liebel”である。

3) “Allerneuestes sehr zweckmaessiges Pruefungsgeschenk fuer Normalschulen der k. k. Staaten.”の排列語は、“Pruefungsgeschenk.”である。

4) “Was ist besser, Krieg oder Frieden mit den Franzosen?”の排列語は、“besser”である。というのは、“Was ist das Bessere?”とも言うことができるからである。——同様にまた、“Etwas fuers Herz auf dem Wege zur Ewigkeit.”という書名では、排

列語は、“Etwas”となる。

5) “Wer ist sie nun ? Schauspiel in fuenf Aufzuegen.”の排列語は、“Wer”。

—“Heda ! oder das Lotto-Buechlein.”の排列語は、“Heda !”となり、“Lotto-Buechlein”のもとに、参照が作られる。

Ⅳ. 追加的な処理規則

1) 15世紀、16世紀の作品が、その本当の書名が、次に挙げるごとく独特であるのは、珍しいことではない。

a) 書名が、発行者の前書き (序文) の形をとって表現されたり、

b) やっと、本の最後の所で、印刷地や印刷年月日を記述する部分に、決まり文句の“Finit (oder Explicit) feliciter”(幸いにも終わることができた) 等の中で表示されるか、あるいは

c) 決まった書名を全くもっていないか、である。

a)やb)の場合には、図書館員は簡単に書名を表わす言葉を見つけ出すであろうし、「ことば」ではなくて“Frobenius Lectori salutem”(フロベニウスから読者への挨拶)あるいは、“Habes hic benevole Lector etc.”(ここに作者から好意をもって～)の文句は、その本の書名と見なされる。

しかし、最後のc)の場合には、匿名 (Panzer) と見なすか、あるいは別の有名な文筆家の作品と見なして、その作品に書名を与えなければならない。さらに、今だに誰が書いたかわからない場合 (従って、なお全く無名と見なされるのだが)、思い切って、自分で適切な書名を与えることが許される。というのは、そうしなければ、その作品のもとに、あちこちから様々な書名が現われて、そ



の作品の同一性そのものが曖昧になるからである。

- 2) 学術論文集や同種の時流に合った著作集は、しばしば、外見通りのそれらしい書名を備えていないことがある。というのは、その書名は、論文の内容を表すものではなく、その本が出版される機会に合わせて述べられた単なる飾りの言葉にすぎないからである。あるいは、外見上の書名は、献辞等、それ以上の何物でもない。—

しかしながら、とにかく、そのような本来的でない書名でも、本当の書名として処理されねばならない。このようにしておくことで、将来、作成される専門目録がたいへん優れたものになる。そして、いずれにしても、そのような論文の内容は調査されねばならないし、それを適切な書名の形にして、カッコ（ ）に入れて、付け加えなければならない。

- 3) 多くの作品で、その書名が、タイトルページ上に同時に二つ、あるいは、もっと多くの言語で記載されていることがある。ラテン文字、あるいは、ドイツ文字が用いられている場合、これらの言語のうち、最初のものだけが採用され、排列語は、躊躇することなく、この最初の書名から採られる。しかし、それらが、われわれの使用するアルファベットに適合しない文字で印刷されている場合（例えば、ギリシャ語、ヘブライ語、アラビア語、アルメニア語、ロシア語、等）、排列語は、次にあるラテン語、あるいは、ドイツ語文字の書名から採られる。そして、ラテン語文字で書かれた排列語を使って、その他の書名から、この書名へ

と参照が作成される。

- 4) 多くの巻で構成されている作品が、各巻に同じ種類の言語による2つのタイトルページを備えている場合（そのようなことは、よくあることだが、独立した巻であると同時に、大きな作品の一部と見なされうる場合）、主たる排列語は、総合書名から採られ、個別の部門の書名から、この総合書名への参照が作成される。
- 5) 著者の姓は、必ずしもタイトルページ上に明白に印刷されているのではなく、時には、
  - a) 序文のすぐ後に続けてか、あるいは、序文の中に、献辞の下に、特典（Privilegium）の中に、等、あるいは、
  - b) それに続く部編のタイトルページ上に、あるいは、本の末尾にある版表示の所に、あるいは、同じ書物の中の翻訳の部の表紙に、あるいは、図書館員なら知っている、どこか別の場所に、あるいは、
  - c) 書名そのものの言葉の中に、秘密めかしたやり方で隠されているか、あるいは、
  - d) 最初の文字だけを使って示唆されているか、あるいは、名前全体が確信を持って決定できないほど簡略化されているか、である。

全てこのような場合には、その本は匿名として扱われるのではあるが、その匿名を排列語として参照を作成することで、たいへんな調査をすることもなく、著者の名前を発見することができる。これはその本が双方から探すことができるからである。

- 6) 架空で、虚偽に与えられた名前、あるいは、謎々に置き換えられた名前は、批

判的な調査を行わざるを得ないだけではなく、今や、タイトルページの文字・活字をも調査しなければならないが、アルファベット順名称目録には、そのようなことを考慮することなく、排列語として採り入れられる。しかし、著者の本当の名前が、信頼性のある、よく知られたものであれば、その名前から問題の名前へと参照を作成する。

7) たくさんの著者が同時に挙げられている場合、その本は、

a) 多くの作品や論文の作品集であり、総合著者としての編者が存在する。そして、もしこれが記載されていないならば、この作品集を作者不詳として扱うことになる。ただし、それぞれの著者の名前から作品集全体の排列語に対して参照が作成されねばならない。その上さらに、タイトルページに記載されているその他の論文の中の作者不詳の論文の排列語のもとに、そのような参照が作成されねばならない。というのは、そのような小品もまた単独で印刷出版されることは珍しいことではなく、あるいは、少なくともそのようなものとして要求される習慣があるからである。あるいは、

b) たくさんの編者、あるいは、寄稿者が記載されている単独の作品の場合、最初の編者、あるいは、著者の名前が主たる排列語として採用され、続いて記載されている各々の名前から、最初の名前への参照が作成される。

8) 雑誌の場合、次のようなことも珍しいことではない。

a) 次々に別の編者が登場したり、

b) 同じ編集者が、あるいは、その後継者が、同じ雑誌に別の誌名を与えていること。

そのような雑誌は、当初の年次の誌名に従って判断し、編者不詳として処理するのが、最も適切である。そして、各々の編者の名前によって、あるいは、非常に頻繁に使用された別誌名によって処理し、そのつど、新誌名の排列語から、当初の年次の誌名へと参照を作ることになる。

9) 一人の同じ著者が、同時に二つ、あるいは、それ以上の姓を用いることは、珍しいことではない。しかし、その洗礼名や家族名を姓と識別することは困難である。例えば、Schmid Phiseldeck、Klamer Schmidt、Anquetil du Perron、Solignac de la Mothe Fenelon、Publius Virgilius Maro、Anicius Manlius Tarquinius Severinus Boethius、Martianus Mieus Felix Capella等。——そのような場合、経験豊かな学者であれば自力で簡単に判断がつくものである。というのは、Schmidt PhiseldeckとKlamer Schmidtは、彼らの本来の姓であるSchmidを名乗っているものであり、Du Perron、Fenelon、Virgilius、Boethius、Martianusおよび、それぞれの別の著者は、文芸の世界では、一致した名声によって、それぞれ、その唯一の名前で知られており、そのほかの著者たちも単独で名づける習慣となっている。しかし、小さな図書館の責任者が必ずしも偉大な学者であるとは限らないし、同様に、大きな図書館に採用されている仕事仲間(図書館員)が、偉大な学者であるとは限らない。時として、そのような多くの名前をもった著者があらわれた場

合、熟練した学者でも、凡庸な者、あるいは、全くの新人であるために判断できないこともある。そのような場合のために、次のような規程が定められている：一人の著者がたくさんの姓を用いている場合には、その不確かな名前の中の最新のものが、主たる排列語として採用される。そして、その他の名前のそれぞれから、この採用された名前に対して参照が作成される<sup>\*)</sup>。

\*) Joecher (ヨッヒャー) の“Gelehrten-Lexikon (もの知り事典)”に、おそらく助けを求めるだろうが、この事典自身が必ずしも首尾一貫しているわけではない。そして、(その補遺版と共に) およそ完全なものではない。一般的な指針も与えることはできないであろう。

- 10) 王侯・貴族に列する人々や司教の場合、また、様々の修道会司祭の場合は、洗礼名、あるいは、自分で選んだか、上位の者から与えられた守護聖人の名前が選ばれて、タイトル写票に排列語として記入される。その際、この名前の最後にある姓は除かれている。
- 11) 同じことが、時にまた、父系祖先の名を採った名前の場合に起こり得る。例えば、Aventinus (本来は、Thurmayr von Abensberg)
- 12) これまで排列語としての著者の名前について言われてきたことは、著者の代理役、すなわち、編集者、翻訳者、および、注釈者の名前についても適用される。

## 2.3.B 排列語の取扱い

### 2.3.B.1 一般的な原則

排列語は、可能な限り簡略化されねばならない。というのは、ある排列語を目録の多くの個所で(その排列語は様々の綴り方がなされているために)調べなければならない場合には、それによって書名の検索がたいへん困難になるからである。——このために次の規則に従うことになる。

### 2.3.B.2 特別な規則

- 1) 人や名詞類の固有の名称からなる全ての排列語は、主格(書名の要求に応じて単数、あるいは、複数で)の形で、目録のなかの最も適切な位置に置かれる。しかし、書名との関係で、同じ場所に変化格であらわれた場合には、その同じ場所に、その本来の形で反復して載せられる。その結果、タイトル写票の精確さが十分に確保されることになる。しかし、この排列語の反復記載は、適切な位置に変化格のまま変わらずに置かれている場合には、書名の文脈の中で、抜き出された排列語の位置に記号(...)を印すことで省略される。しかし、単数で主格の場合、および、男性の姓の場合にも排列語として採用していくといった風に、上述の規則を拡大していくことには注意しなければならない。というのは、そのような排列語で、いつも書名を探す人は、さしあたりの単複の形や姓についても知っているからである。例えば、KunstかKuenste、VieかVies、AngloisかAngloise、あるいは、Angloisesといった名前、等。したがって、見つけ出すのが遅れるのは、排列語が単数か複数によるものでも、姓

の差異によるものでもない。おそらく、その他の変化形か、検索者が必ずしも正確に思い出せないことによるものであろう。

2) 様々なタイトルページ上に、正書法に適った形での様々な排列語が存在するが、唯一の規準に従った形に限定される。その場合、古典時代の著述家自身が、統一された名前<sup>\*)</sup>でない時には、ある一般に通用しているその排列語の形から判断した結果、優先権を認められた別の形へと変更が指示されることになる。

したがって、例えば、全てのMajer, Mayer, Mair, Mayr, Meier, Mejer, Meyer, MeyrおよびMajerusは、Maierに還元され、全てのKayser, KeiserおよびKeyserはKaiserに、全てのZeytung, Zeyttung, ZyttungおよびZytungeはZeitungに、BoeciusはBoeethiusに、PhurnutusはCornutusに、HernandezはFernandezへ、等、還元される。

\*) そこで、例えば、ドイツで最高の作家でも、次に挙げることはまだ必ずしも統一されているわけではない。deutschと綴られることもあるし、teutschと綴ることもある。t、tおよび、rは、固執されるとは限らず、それらの代わりに、一貫して、f、f、および、i、あるいは、ff、ffが使用される。ラテン語のドイツ語表記、および、ギリシャ語のドイツ語表記による単語の中ではCは、必ずドイツ語のCを使用するし、発音のための必要条件から、時には、Rが、時にはBが印刷されることがある、等。そのような場合には、ある一方の書き方を採った時には、常に、もう一方へ、一度は参

照を入れておくことが必要不可欠である。

3) さらにまた、よく知られたある名前が、排列語にする際に順序を逆にして変名に置き換えられていたり、あるいは、からかったようなやり方で、台なしにされている場合には、その真実の形が主たる排列語として採り上げられ、書名の文脈の中では外見を損ねた形で繰り返される。そして、この名前から真実の名前に対して参照が作成される。例えば、SinedからDenisへ、JesuwiderからJesuitenへ、等。

4) 本当の名前が、時々、別の言語に翻訳されたり、あるいは、その外形から別の国の発音に合わせて綴られることがある。しかし、(同じ著者が、時にはこちらの言語で名乗り、時にはあちらの言語で名乗る場合には) 簡略化するために、最も頻繁に見い出される方の名前が排列語として採用され、別の語の変化形から、こちらの名前へ参照が作成される。そこで、しばしば次のような例が見られる。SchneiderはSartor、SartoriおよびSartoriusへ、SchusterはSutorへ、MuellerはMolitorへ、FuchsはVossあるいはVulpis、等に翻訳される。そして、Quintus CurtiusはQuinte-Curceへ、Aulus GelliusはAulugèleへ、Des CartesはCartesiusへ、WilhelmはGuglielmo、GuillaumeおよびWilliamへ、HomerusはOmeroへ、SchopperはSciopiusへ、等、変換される。——しかし、既に存在している姓を上述のような変形した名前に変更したり、これを名詞類にまで拡大して、例えば、全てのEnsayo、Saggio、Essai、等をVersuch(試作、習作)へと簡略化するような規

則は、バカバカしく、役にも立たないものである。

- 5) ある図書の書名がドイツ語やラテン語とは全く異なる文字をもった言語で書かれている場合<sup>\*)</sup>、その排列語は別の言語に翻訳されることはないが、アルファベット順排列のために、同音のラテン文字に差し替えられる。それに反して書名自身は、そのオリジナルな文字で書き写される。——そのような図書をかなりの数、所蔵している大規模な図書館では、その独自の文字を使っている言語ごとに特別な目録を作成し、排列語もオリジナルな文字を使って、その言語のアルファベット順に排列することが良いであろう。

<sup>\*)</sup> ある図書の書名をラテン語、あるいは、その他のヨーロッパの言語の一つに翻訳したものを、一緒に添えて印刷されている場合には、いずれにしてもこの部分から排列語が採り出される。  
(付録図版Eを見よ)

- 6) 複合語からなる排列語は、本来、ドイツ語においてのみ発生するのだが、時にはそれらは完全な鎖 (Ketten) の体をなすことがある。それで、図書館員が暫定的にもこれに対して思い切った規則を定めなければ困ったことになるであろう。

しかし、これらの複合語には様々のやり方が存在する。つまり、

- a) たいていのものは、2個、または3個の短い主要な名詞類で構成されているが、普通の言語の使い方からも既に単一の語と見なすことができる。  
Staatsrecht、Naturgeschichte、

Reichskammergericht、等のように。そして、それらは分離記号でつなぎ合わされているときもあれば、そうでない場合もある。これらはそのまま単一の排列語として採り上げられることになる。

- b) しかし、Armen-Versorgungs-Anstalten、Lebens-Verlaengerungs-Kunst、等のような多音節の複合語があったり、あるいは、分綴符を用いた一続きの名詞類、および、最後に、接続詞でつながれた名詞類、Wald-Forst- und Jaegerlei-Lexicon、Haushaltungs- und Landwirths-Wissenschaft、Cameral-Polizei- Oeconomie-Forst-Technologie- und Handels-Correspondent、等、そこで、最後の単数か複数の主たる名詞類が排列語として採用される。そして、前の方に並んでいた名詞類は、全て単なる形容詞と見なされる。したがって上記の例から、それに続く排列語が順を追って判明してくる：Anstalten、Kunst、Lexicon、Wissenschaft、Correspondent。そこで、書名そのものを筆写する中で、採り出された排列語を除いて（その場所に (...) の印が付けられて）複合語のつながり全体が書き写される。
- c) 全てのつなぎ合わされた名詞類の意味内容は、非常に同質のものなので、それらは一緒になって一つの主たる概念を形成する。そこで、排列語のそのような採取によって、この件は処理される。しかし、Stadt- Hof- und Landleben、等のごとく、その概念は様々である。そこで、たくさんの排列語を採り出す

ことが良いことになる。そうすることによって、与えられた例では、Stadtleben、Hofleben、Landlebenのように、最後の名詞類を、先行したものと関係づけることになる。そこで、完全なタイトル写票から採ったこの排列語については、その他の排列語のそれぞれから、これに対して、一つだけ参照を作成することになる。

7) 冠詞、あるいは前置詞を伴った、あのフランス語、イタリア語、オランダ語等の固有名詞を単純な規則に従わせることは、おそらく最高に困難なことになるであろう。その場合、多くの固有名詞が、ある時には冠詞や前置詞と一語に一体化していることもあれば、時にはまた、固有名詞から分離して現われることもある。例えば、LebrunとLe Brun、DelilleとDe Lille、DelrioとDel Rio、等のように。——しかし、次に挙げる規則では、そのような場合でも、あらゆる首尾一貫しないことや困った状況を最も確実に防止することができると思われる。

a) 冠詞 (Le、La、Les、Las、Du、Des、Di、Del、Della、Dall'、等) は、常にその固有名詞の離れることのない構成要素と見なされて、固有名詞の前に存在している。この場合、他の主たる名詞類が本物の冠詞を常にその前に置いているのとは違っている。

b) 前置詞De (アポストロフィの付いたD'も同じく) は、aやabと同じく、常に固有名詞からは分離している。

c) 全て同じように、オランダ語の前置詞Vanは、1個の冠詞と一緒に結合されている時 (Van den、あるいは、Van der)

以外は、分離している。というのは、この後の方の場合には、基本的にVanそのものが、名前を表す場合には冠詞を伴うことを必要とするからである。

d) 固有名詞の前にある語、Saint、Santo、Santa、San、および、Sanct (これらは省略せずに完全に綴られていることもあれば、S.あるいは、St.と簡略に表示されているかもしれない) は、常に固有名詞の分離されることのない構成要素として処理される。しかし、発見のための手間を可能な限り軽減するために、本来の名前から、それらの名前に対して参照が作成される。例えば、「Simonは、Saint-Simonを見よ」のように。

8) ある作品が、二人か、あるいは、それ以上の数の著者の作と見なされていて、ある時は、ある一人の名前のもとに、またある時は、別の名前のもとに編集されている場合には、そのような作品の様々な版を、どちらかの版にまとめても同じようなものである。そこで、それぞれの版ごとに排列語として並べられるが、一つの著者のそばに別の著者が列挙され、書名の文脈の中のこの最後の名前は、その位置に置かれ、そこから最初に置かれた名前へと参照が作成される。このやり方の最も目立った例として、小冊子“De imitatione Christi” (キリストにならいて) があるが、著者として、Thomas a Kempisの場合も、大修道院長Gerseniusの場合も、宰相Gersonの場合もあるが、その上さらに、二、三の者は、聖なるBernhardを書き加えることもある。——似たような例として、次の作品もある：“De vita excellentium Imperatorum”

著者として真っ先にAemilius Probusが挙げられることもあれば、Cornelius Neposの場合もある。また、その他の人々の場合もある。

9) 学術論文<sup>\*)</sup> の場合には、図書館員は排列語を決める際に、代表者の名前と後援者の名前とをしばしば決定しかねることがある。多くの場合、著者としての名誉を一貫して代表者に与えるか、あるいは、全て後援者に与えるかを規則化することによって、このゴルディオスの結び目を粉々に打ち砕くことができる。しかしこのことは、しばしばタイトルページ上に明記されていることがある。“Autor et Defendens” (著者および保護者) また、しばしば同じように“Autore et Praeside” (著者および守護者)。このような場合でも、タイトルページが嘘をついていると責めるべきであろうか？——もちろん多くの人々が、代表者諸氏は、ほとんど常に著者であり、作品に対する彼らの仕事が弟子たちに利益をもたらすことを、いつも好ましく思っていると主張するであろう。——文芸批評的な歴史研究家は、もしそのことに苦勞する価値があるとわかれば、これを調査するであろうが、作品の書名に使用されている言葉を信ずることが、図書館員にとっては職務である。そうでなければ、図書館員は、筆名を使っている全ての著者の実名を究明しなければならなくなる！

- a) 書名の中で著者と名乗っているその名前を常に排列語として採り出す。そして、
- b) この名誉をはっきりと明文をもって捧げているのが、代表者でもなく、後

援者でもない場合は、最初に記された名前を排列語として選び、最後に記された名前から、この名前に対して参照を作成する。これにより、この学術論文を両人から探し出すことができる。

\*) 学術論文については、特に大規模な図書館においては、アルファベット順名称目録の作成についても、また多数の資料の中から特定の書名を探し出すことさえも、非常に遅れがちである。そこで、特別に学術論文用の目録を置いたりせず、重要な作品をできるだけ早く発見することができるように、あの文学的な小品のタイトル写票の作成は、最後まで延期しておくことが賢明であろう。

## 2.4 タイトル写票のその他の構成要素

### 2.4.1 狭義の書名の写し (Titel-Abschriften)

我々がすでにタイトル写票に関して一般的に述べてきた第1章(第2節および次ページ以下)におけるあの行動規範は、ここ狭義の書名の写しの場合にもまた、特に注意を払わねばならないものである。

### 2.4.2 版の特徴

- 1) 新刊の普通の作品の場合、決まった位置に印刷地と発行年が印刷されていれば十分である。印刷者と発行者の名前は、
  - a) 豪華版、あるいは、最も有名な印刷所で製作された版の場合、例えば、Aldus、Elzevir、Didot、Bodoni<sup>7)</sup>、等。
  - b) たいへん珍しい版の場合、また、
  - c) インキュナブラ(初期印刷本)と言

- われるものの場合、たいてい決まり文句で言われているように、形式的に版についてのあらゆる指標を精確に書き写すことが、より賢明なやり方である。
- 2) 印刷地も、印刷者も、発行者も、発行年も述べられていないか、あるいは、1個またはそれ以上のものが、これらの記述に欠けている場合、横線 (——) で欠けている個所を表示する。これによって将来、そのようなタイトル写票を見た時に、この指示によって、書き写す際に見落とししたものではなく、本当に欠けていたということを確認することができる。(付録図版Hを見よ)
- 3) 図書館員が、1個所か、それ以上のそのような欠けた部分について、どこか別の場所から知り得た場合には、その個所にカッコ ( ) に入れて記入することにより、この版については心配すべきことは何もないということを示すことになる。
- 4) でたらめの印刷地、発行者等がもっともらしく印刷されていることがある。そこで、本当に信頼できることがわかっている時だけ、それらを例のカッコ ( ) で囲んで記述するのが良い。同じことが発行年についても言え、印刷ミスによって間違いが起こったり、あるいは、故意に間違えて記されていることがある。
- 5) 写本 (Handschriften)<sup>8)</sup> の場合、その写本が書き写された場所、書き写した人の名前、および、印刷地、印刷者、印刷年の記載されている位置にある完成年が重要である。しかし、それらはMS. (Manuskript) [写本・稿本]<sup>9)</sup> と同格だからと言って、その写本を価値の低い本であると判断することは決してないであろう。
- 6) ある作品の続きの部分が、最初のものとは、印刷地や発行者が別のものであったり、あるいは、発行年が異なっている場合には、先ず第一に、これは別個のものとして認定されねばならない。(付録図版Iを見よ) 様々の版から寄せ集めて作り上げられた、そのような個々の巻は、一つの版の完全な書物群と区別し、決して後者(完全版)を重複本としてはねるようなことがあってはならない。
- 7) 発行年は常にアラビア数字で記述される。というのは、これは読み取るのに最も良く知られたものだからである。ギリシャ語、ヘブライ語、ロシア語等の文字の数字には、チェックのためにローマ数字が添えられる。しかし、ローマ数字は、印刷ミスによるものか、そうでなければ異例の形による場合にのみ、その書かれた本が精確に特徴づけられることに貢献することになる。

#### 2.4.3 注記 (Bemerkungen)

いずれにしても、本また本と、精確な調査を必要とするタイトル写票の作成中には、タイトル写票に様々の短い注記を添えることが、一つの仕事となる。将来、専門目録や件名目録を編纂する際に、様々の失敗を防止し、時には、二重、三重の苦労を省くことに、これが繋がっていくのである。カッコ ( ) 内に記述された発行年に若干の隔たりがあったり(付録図版B、IおよびKを見よ)、この位置で記述するには十分なスペースがない場合に、タイトル写票の裏面にわたって記述できる、といったように。次にあげる状況にお



いては、特に有益と思われる。

- 1) 作品の主要なテーマについて、書名の表現が適切でないか<sup>\*</sup>、あるいは、謎のような言葉で組み立てられている書名、例えば、“Das goldene Kalb (金色の子牛)”、“Straussfederm (ダチョウの羽飾り)”など。

\* ) 作品の内容に対する書名のこれらのアンバランスを指摘することは、図書館員への過重な要求となるかもしれない。というのは、これをやろうとすれば、図書館員は作品の一つ一つを注意深く読み通さなければならないからである。ここで話しているのは、通りいっぺんの観察で直ちに注意を引くような不自然さの場合であり、それらはそう珍しいことではないのである。

- 2) その本の注目すべき構成要素、例えば、注釈、翻訳に添えて印刷された原文、銅版画、地図、等に一切触れられていない、あるいは、それらの多くが表示されていないが、実際には作品として扱われている。
- 3) 書名が、その作品がそもそも所有しているべき書名とは全く異なるもので、改作を推量させる形を備えている場合、例えば次の場合など、その作品が詩なのか、散文なのか、あるいは、修辭学的なものか、戯曲形式のものか、ロマン派風なのか、風刺的なものか、事典形式で書かれているのか、等を書名から察知することは、しばしば不可能である。あるいは、扱っている主題が、歴史的なものか、哲学的なものか、神学的なものか、法学的

なものか、等々。あるいは、様々のそのような観点から、同時に解釈され得るような作品がある。これらはたいがい、書物を短時間、通覧するだけで目に留まるものである。

- 4) 様々の言語で書かれた作品の、本文の一つである言語で書かれた書名があつて、この状況について何の説明もない場合。
- 5) 作品それ自体としてか、特に珍品であるがゆえに存在している版か、重大な利点のために存在する一冊か、例えば、ある巻の著者により書かれた献辞によるものか、一人、あるいはもっと多くの有名な学者からなる周辺集団の自筆本か、上等の銅版画か木版画等が綴じ込まれたり、貼り付けられたもののためか、作品自身に属するものではないが、珍しい印刷物によるなど、際立ったもの、あるいは、個々の欠損や損傷を帯びているがゆえに。
- 6) 最後に、図書館員が、ある作品のここに文学的に重要な逸話が載っていることがわかった場合、それらは間違つた場所に記述されるべきではない。

#### 2.4.4 付加資料(Beibaende)<sup>10)</sup>の取扱い方

- I. ある作品に別の作品が一つ、あるいは、もっと沢山の作品が合冊製本されているかどうかを発見するために、その巻の頁付を全て一つのもの、あるいは(その巻があまりに分厚い場合には) 続く別の作品のある部分とみなして頁を数えるが、右手でその巻の冒頭から親指を差し入れて一枚一枚を確認していくことになる。その際、頁数が連続しているか否か<sup>\*</sup>、をチェックする。あるいは、巻の真ん中あたりで、再び1 ページが始まり、それ

により標題紙が存在することが判明し、そこから、ここにあるのは、全く別の作品であることが分かる。あるいは、単に前にある作品のある部門が始まるだけかもしれない。

\*) インキュナブラ (初期印刷本) の場合、しばしば頁数もなく、折丁番号もなく、目印もないことがあるので、文字や文章の形、また、段落などに注意を払うことが重要であり、そこから新しい作品が始まる可能性がある。

II. 一冊一冊が合冊製本された巻では、上に突き出るように短冊状の紙片が差し込まれる。(製本業者によってPressel\*\*)[見出しの付箋] が取り付けられている場合には、この作業は不必要となる)そして、この冊子が、手元にある巻の中の何番目の挿入冊子 (Beiband)<sup>11)</sup> であるのか、標題紙の上部右角に番号を記して示す。その際、その巻の最初の作品はこの巻には含まれていないように見える。というのは、この作品については、挿入冊子の一冊であると言うことができないからである。しかし、この作品を挿入冊子の一部と見なす人もいるであろう。したがって、その巻の中の最初の作品が正に第一番と表示されても間違いを犯しているわけではない。

\*\*\*) 白い羊皮紙の付箋 (Presseln) は、挿入冊子を開くのに最適である。というのは、本来の挿入冊子の番号をその付箋に記入できるからである。

III. 挿入冊子のタイトル写票は、独立した作品と同様に、同じ形式で記述される。

ただ一つだけ違うところは、その巻の巻数のもとに、何番目の挿入冊子であるかの番号と合わせて、算数における分数の形で表現されることである。(付録図版LとMを見よ) 即ち、その巻の巻数が分子、挿入冊子の番号が分母で表される\*\*\*))。

\*\*\*)) その巻の巻数のうしろに挿入冊子の番号をカッコ ( ) に入れて記述する方法もある (こちらが好ましいと思われる人には)。わたくし自身は、件名目録 (付録図版P—R) の原本で同様に、この方式を採用している。

IV. 挿入冊子が、内容的には、本体とは別の専門分野に属する場合でも、この部分もまた本体の主題の名称のもとに置かれるが、挿入冊子の独自の主題名もまた記述される。ただし、カッコ ( ) に入れられる。

V. 挿入冊子が、その本体よりも小さい版型の場合には、どうしても目立つことになってしまうが、版型表示のための決まった位置に、本体の版型表示の下に、挿入冊子の版型を同様に記入するが、その場合、カッコ ( ) に入れて記入することになる。

例えば、 $4^{\circ}$   
(  $8^{\circ}$  ) のように。

VI. パンフレットやその他の薄手の小品も、挿入冊子と全く同じ扱いがなされる。

詳しく言えば、それらは実際には、一冊ずつ立てて並べることができないため、ケースに詰められている。ケースに貼ら

れた小さなプレートに、各巻と同じ番号がケースごとに与えられる。そして、その中にある各著作物には、このほかに挿入冊子としての別個の番号も与えられる。こういう状態ではあるが、必要なときには、ケースの中の個々の著作物を取り出すことができる。

## 2.5 アルファベット順排列

タイトル写票を用いて、できるだけ早く本そのものを探し出せるようにしようとするれば、それだけ益々、その仕事のために多くの時間がかかるようになり、不確実な探索作業のために、さらに時間が失われることになる。1件の完成したタイトル写票を入手したならば、直ちにそれを正確なアルファベット順に排列し、それに続く一般目録〔作成〕の第一段階として、ひたすら熱心に繰り返し作業をやらなければならない。また、タイトル写票の大きな塊りに1枚のタイトル写票を追加して、それらのものを全て一度にきちんと排列しようとするれば、タイトル写票の整理は、はるかに骨の折れる、困難なものとなるであろう。

### 2.5.1 機械的な取扱い

- I. すきま風に吹き飛ばされたり、それぞれが紛らわしい影響を受けないように、机の上にチョークで、普通に使っているラテン語のアルファベット24文字を、タイトル写票が十分に収まるスペースをもち、書かれている文字が覆い隠されることのないように間隔をおいて書く。
- II. 次に、手にしているタイトル写票を、その中の排列語の最初の文字の位置へ置いていく。例えば、BaierはBの所へ、KantはKへ、XenophonはXへ、Nachricht

はNへ、AnleitungはAへ、等。

- III. 全てのタイトル写票は、次のようなやり方で配られる。Zから始められ、それぞれの文字（あるいは、大部分の文字）のところに配られて、小さな塊りができたり、あるいは、1枚だけのタイトル写票の場合には、離れた場所に十文字形に交差して重ねて置かれる。そして、上の文字がAである塊りが出来上がることになる。
- IV. 次に、Aの塊りのタイトル写票のそれぞれを、その排列語の2番目に位置する文字の所へ置く。例えば、AntoniusはNに、ArchenholzはRに、AbbildungenはBに、等。
- V. この2回目の振り分けの後、(Bの塊り、Cの塊り、等は、Aの塊りが完全にアルファベット順に排列されるまでは、長く保留されたままであるが)新たに溜まっているいくつかの塊りが、かなりの量のものであった場合、3回目の振り分けが必要であることがわかる。そこで、この全ての2回目の振り分けの塊りを別の場所で、ZからAまで十文字に交差して重ね合わせる。そして、2回目の場合と同様のやり方をする。ただ排列語の第3番目の文字だけを考慮するという違いがあるだけである。例えば、Abhandlungはhの所へ、AbrégeはRへ、AbususはUへ、Abbildungenは再度、Bへ、等、振り分けられることになる。
- VI. それぞれの文字の場所に、わずかしかタイトル写票が置いてない場合には、それらを再度振り分ける作業なしに、完全なアルファベット順排列を簡単に行うことができる。即ち、かなりの文字の場所

に、たった一枚だけがあって、ほとんどの文字の所にタイトル写票が置かれていない状態である。そこで、それらの写票をAから始めて正確なアルファベット順に排列することになる。その時、正確に排列しながら、書かれている面を下にして別の場所に重ねて置いていく。

VII. それから2回目の振り分けの結果である、十文字形に重なり合っている塊りからBの塊りを取り出し、これも同じやり方で正確に排列し、同様に処理した後で、以前に排列された最初の塊りの上に重ねる。第3回目の振り分け分についても、また、第2回目の振り分け分の残りの塊りについても同様のやり方で処理する。

VIII. そのような方法で第2回目の振り分けの全ての塊りが片付けられて、第1回目の振り分け作業のBの塊りが第1番目に回ってくる。そして、タイトル写票の全てのストックに対して同じ処理が行われるまで順序正しく進んでいく。次に、全ての反対向きに置かれていた塊りをひっくり返すと、その時まで完成していたタイトル写票によって、直ぐに使えるアルファベット順目録が自ずから出来上がることになる。

IX. これらのものをその排列を維持するために十分な数のケースを作る。それは上部が開いていて、3から4ツォル [9～12cm] の深さの箱で、タイトル写票がスムーズに入れられる大きさのものである。出し入れの作業は非常に頻繁に行われるが、これによって簡単に、かつ、タイトル写票を傷めることなく、全ての箱から引っ張り出したり、また入れたりす

ることができる。なお、それぞれの箱には特別にタイトル写票と同じくらいの幅の薄手のボール紙のフタがかぶせられる。このボール紙を箱の厚みに合わせて2個所の鋭い縁のところ、下の面に向けて折り曲げると、箱から簡単に取り外したり、かぶせたりできるようになる。それに続いて非常にしばしば新しいタイトル写票が挿入されることによって、箱の中味はますます増えていくので、再び箱を二つに振り分けることになる。それで各々の箱の中でアルファベットの区切りが目につくように、上に突き出した挿入カードを入れる。

- X. これと同様の処理を行うことによって、新たに作成されたタイトル写票の塊りは、
- a) 自ずから排列される。
  - b) 文字Aが上に来るまで、ただただ置き続ける。
  - c) これまでの目録のケースから取り出されたタイトル写票の束は、別の束の後ろに並べ、そして新しい束の横に置かれる。
  - d) アルファベット順排列のために、時にはこちらの塊り、時にはあちらの塊りを必要とする場合には、この二つは互いに一つにまとめられる。一枚の、あるいは、沢山のタイトル写票が必要であれば3番目の塊りとして、二つの塊りの中の、一方の塊りの横に置かれて、全ての増加分がこれまでの目録に併合されるまで、これは続行される。
  - e) それから、目録全体が再度、必要な数のケースに分配される。

## 2.5.2 アルファベット順排列の原則と 実際的な規則

I. 原則：排列語はできる限り単純化されねばならない。ここでは特に、それが適用される。

a) 本の中の各アルファベットの文字は、音声が似ている場合に、しばしば互いに混同して使用される。

b) ある時は単音で、またある時は複合音で使用されるものは、簡単な規則で処理される。そこで我々は、全ての不整合を防止するために、きっぱりと次のことを取り決める。

1) 文字の i と j、それから v と u は、1 個の似た文字として処理される。

2) 子音の ch、st および sch の場合は、それらが紙の上に合成されて現われていることから、また、アルファベット順排列の場合、個々の文字として考慮されているために、それぞれ単独の文字となる。

3) 二重母音の ä、ö、および ü は、常に二つの単一の文字、ae、oe および ue と見なされる。何故ならば、これらはまた、しばしば後者の形で印刷されて現われるからである。

II. 異なる著者が同じ姓を名乗っていることは珍しいことではない。従って彼らの作品は、一つの排列語のもとに重なることになる。そこでこれらは、再び、彼らの洗礼名か個人名のアルファベット順排列によって、お互いに分離されることになり、これらの洗礼名や個人名は二つ目の排列語と見なされる。そのような作家で洗礼名もまた同じである場合、例えば、次のように処理する。

a) 彼らとその作品を書いた時代から、または

b) 彼らの一人ひとりを取り扱っている主たる学問から識別する。しかし、いずれにせよ、例えば、父と息子が同じ洗礼名であったり、同じ学問を専攻していたり、作家として同じ時代に登場していた場合には、目録上で同一人物として処理されていても、読者も、この作家も図書館員を悪く思うことはないであろう。

III. 一人の著者<sup>\*)</sup>の種々の作品は、作者不詳の場合には、その書名の排列語が採用され、それによって排列される。

\*) そのような著者 [作者不詳] による、別の言語に翻訳された作品については、原語による版において前もって触れており、原語によるアルファベット順排列を行い、それに続いて翻訳本としての処理がなされる。

IV. どうでもよいような排列語をもった意味不明の書名の場合、排列語としての称号、あるいは、賢明な判断で、その本が扱っているテーマを表わしている書名の中の名詞類が、第2の排列語として考慮される。そして、タイトル写票のその個所に下線が引かれる。

V. ある作品の様々な版は、印刷年の順序で排列される。

## 2.6

### 2.6.1 重複本の除去

たびたび要求される作品を2部、あるいは、それ以上の部数、所蔵していることは、公共

図書館においてはとても良いことではあるが、わずかな資金で運営されているたいていの公共図書館の場合、各作品については一部だけの所蔵に満足して、余っている一部は交換するなり、売却するなりして、別の重要な作品を入手し、図書館を充実させることが、やはり賢明な策ではないだろうか。

I. 厳密な意味で重複本とは、ある作品の1つの同じ版について、互いに異なる個体と見なす著しい状況が全くない2部の本を言う。

II. だからと言って、重複本を探し出すために、ことさら目録全体を一枚一枚めくって、じっくり見る必要もない。また、除去された重複本のタイトル写票を筆写された目録に記入し、それらを将来、再度、抹消することなどは必要のないことである。目録を筆写する作業中にしばしば重複本を発見することがあるが、その時点で次の対応をとるのが、最も適切な処置である。

- a) 重複本を2冊とも取り出してくる。
- b) それらを直ちに互いに比較・照合する。
- c) 保存状態のより劣った本を決定する。そして、
- d) 整理番号順目録 (Nummern-Repertorium)<sup>12)</sup> のその本の排列語を抹消することにより、その処理された番号を将来、新たに入手される同じ専門分野で、同じ版型の本に与えることができる。
- e) 同時に、重複処理によって排除されたタイトル写票は、常に記述された面を下にして特定の場所に順番に重ねて置かれる。それは同時に移動可能な全

ての重複本の目録を自ずから形成することになる。

f) 同様に、館内の離れた場所においても、順番に選り分けられるように、排列された状態で置かれている。そこでは、簡単に発見できるように、それらはアルファベット順の状態で見られている。

## 2.6.2 アルファベット順名称目録の筆写による作成

筆写により作成される機能的なアルファベット順名称目録については、次のことが要求される。

- I. 簡略化された書名の一覧表であり、
- II. 将来の増加分を挿入するための、かなりのスペースを残しておくこと。

### 2.6.2.1

素早い一覧性は、次のことで促進される。

- 1) 大きな版型の紙を使用すること。
- 2) 排列のための指標 (排列語) を大幅に除去すること。
- 3) たいへん読みやすい筆跡で書いていること。

それでさしあたり、厚い紙質の大型フォリオ版の紙を十分な在庫と言えるだけ、入手し、これらに線引き器を使って、付録図版Nのように有効な罫線を引く。そして、その上に書名等を次のように書き入れる。

- a) 左側の最初の垂直のスペースには、アルファベットによる排列語
- b) 2番目のスペースには、書名
- c) 3番目のスペースには、版の特徴 (出版事項)
- d) 4番目のスペースには、版型表示

- e) 5番目のスペースには、専門分野の主題名の表示と本の整理番号、これによりその本の固有の排架位置が決定されることになる。

ここでまた、挿入冊子 (Beiband) の何巻目かについては、個々のタイトル写票上の巻数の下に、算数で使う分数の形式で付け足すことができるし、あるいは、この巻数の末尾に、カッコ ( ) に入れて、付け加えてもよい。

## 2.6.2. II

将来の増加図書を記入するために、一つの書名と次の書名との間に、かなりのスペースを取ることは、アルファベット順名称目録の場合は、必要悪となっている。そこで様々のいわゆる、連結 (Schaltbaende)<sup>13)</sup> の工夫がなされてきた。しかし、大規模な図書館の目録にとっては、これらのことは適切な措置とは思われない。

- a) それに対する技巧的な調整のために、恒常的な調整の仕事をするには、長くは耐えられないからである。
- b) そのためには、数学的には同じ枚数の紙を切り詰められることが不可欠となる。
- c) 次々に一枚の紙を追加せずに、そこにある紙の上にその内容を間隔を置いて書き、ここに再び挿入するつもりでいたとしても、それでもなお、一件一件の間隔の多くが節約されそうにもないからである。

また、本のタイトルを筆写する際に必要とされる1件ごとのスペースの間隔を決めるのは個々の図書館員の独自の判断にまかせられねばならないが、厳密に言えば、

- a) その図書館の規模、および

b) 予測される増加図書の冊数の量による。目録の筆写を個人に任せることについては、図書館員は身に沁みて次のことを理解している。たいへん読みやすい筆跡ではあるが、一件一件を筆写するにあたって、相応の間隔を決定できるような文献的な知識が乏しい場合には、この筆写担当者は自分で1巻もの、あるいは数巻ものの書物事典、例えば、Georgi<sup>14)</sup> やHeinsius<sup>15)</sup>、あるいは、大規模な図書館の印刷目録を手元に置いて、それを使ってさりげなく、タイトル間隔にどれくらいの増加図書が入ってくる可能性があるかを常に判断できるようでなければならない。

今後とも全てこのような慎重さを維持するとしても、時々、筆写された目録の1ページのある個所に挿入するための余地が与えられていないことがある。そのために補遺目録を設置するという逃げ道を選択する必要はなく、次に示す補助策によって、なおかなりの年数にわたって、余計なことをしなくても済ませることができる。

挿入する場所が足りなくなった場合には、そのつどそのページを、表紙と背の間の溝のところから4分の1ツォル [約6mm] の幅を残して切り取る。次に一枚の全紙上に、相当の間隔をあけて、先ほど切り取られたページ上に書かれていたタイトルを書く。次にこの全紙を先ほど切り取られたページの残された部分に張り付ける。これでまた、かなりの期間、挿入のための新しいスペースが確保されたのである。しかしこのためには、目録の製本をやや弛めに綴じ合わせることが必要で、製本業者にそのことを依頼しておかなければならない。

筆写された目録に、まだ記入されていない紙を間紙として入れさせることにより、増加

図書目録を挿入するためのスペースの不足を予防できると、かなりの図書館員は信じている。しかし、このような予防措置について、わたしは拍手をもって賛成することはできない。というのは、

- 1) 多くのこれらの挿入のためのページは、全てではないが、大部分が永久に空白のまま残るであろうし、ここ2、3年の間は、ほとんど同じくらいの量で、少なくとも数か所が記入されて一杯になる程度であろう。
- 2) 多くの全く空白の、あるいは、半分ほど記入された挿入ページによって、タイトルの素早い一覧性が滞らせられるからである。
- 3) 挿入ページ上の追加されたタイトルは、その他のタイトルとアルファベット順排列の上できちんと整理されていないので、これが原因となって、迅速な一覧性を妨げることになるからである。

### 2.6.3 増加図書取扱

#### 2.6.3.1

未製本の作品は恐らく利用に供されることはできないであろう。それゆえに、これらの資料はできるだけ早く製本され、それによって図書館に正式に編入されて、直ちに公益に奉仕するための利用に供されるよう配慮しなければならない。

これに反して、次々に分冊、あるいは、別冊で刊行され、個々に製本されないために長期間にわたって未製本の状態にある資料は、専用の鍵のついた保管箱に納められる。詳しく言えば、ある任意の順に並べて（最も良いのはアルファベット順に）保管され、突き出るように貼られたラベルによって目に付くよ

うになっている。

しかしここでもまた、必要に応じてそれらの作品を探すことができるように、個々の作品について、手元にある別冊、または、分冊の精確な記述によって、通常のタイトル写票を作成する。しかし、少し違うところは、この本はまだ未整理だということを示すために、主題名の表示の代わりに、ただ鉛筆でAという記号を書き付けることである。また、その本が未処理のため、整理番号の場所は、一時的に空白のままである。

これらのタイトル写票は、他の資料と同様に目録に組み入れられ、これらの作品が1冊に製本され次第、前述の記号Aは、弾力性のある消しゴムで消去され、その本の配置が決定された主題名と整理番号をインクで記入され、タイトル写票にも追記される。

#### 2.6.3.2

製本された本は、

- 1) その内容に従って分類され、
- 2) この分類に対応した主題の名称が、（背表紙に貼られた小さなラベルの真ん中か、おもての表紙の内側か、前ページの内側に、）この作品に与えられることになる整理番号とともに記入される。
- 3) この番号は、アルファベット順排列語とともに適切な整理番号順目録に記入される。
- 4) 必要なタイトル写票が作成された後で、
- 5) 本それ自体は、図書館の中のふさわしい場所に排架される。

#### 2.6.3.3

そのような方法で作成されたタイトル写票は、



- a) 利用可能なアルファベット順目録がまだ完成していない場合には、排列待ちのタイトル写票の塊りへ付け加えられる。
- b) 手持ちのタイトル写票が、すでに排列されている場合には、塊りの中の相応しい位置に挿入される。
- c) そのタイトル写票が、もうすでに本目録に筆写されているならば、その中の個々のタイトル写票の内容により、適切な場所に集められ、その他のすでに本目録に筆写されたタイトル写票の仲間入りをさせられて、これに続く専門目録の作成に役立てられることになる。
- d) また、必要な専門目録やアルファベット順件名目録 (alphabetische Realkatalog) (これについては、続く第3部で詳しく紹介される) がすでに完成している場合には、新たに入手された本もそれぞれ遅滞なく、これらの目録に記入されねばならない。そしてこの場合には、もはやタイトル写票を作る必要はない。というのは、それぞれの書名は直接、各目録に記入することができるからである。

#### 2.6.4 補遺目録(Supplement-Katalog)

アルファベット順名称目録の項目間のスペースが、2、3個所でほぼ使い果たされたり、また、詰め込み過ぎた一枚一枚のページを切り抜きや書き換えの補助策では、もはや乗り切れないときがついに来てしまった時には、

- 1) 目録の中に、もはや記入するに適した場所がない場合には、それらの本の全てについてタイトル写票を作成すること。
- 2) これらのタイトル写票を常にアルファベット順に排列してケースに保管すれば、

移動可能な補遺目録として使用することができる。これが大幅に増えて、利用するのに一苦労と言われるまでは利用できる。

- 3) これをフォリオ版のサイズで筆写すれば、目録本体と全く同じものとなる。しかしながら、これらのタイトル写票が補遺目録に組み込まれたならば、直ちに手元にある専門目録や件名目録 (これは補遺を必要としないが) に記入され、整理番号や排列語は、該当する整理番号順目録に追加される。

#### 訳注

- 1) アルファベット順名称目録 (alphabetischen Namen-Kataloge)

「名称」という訳語に違和感を覚えるが、ドイツ語の原語は“Name”の複数形“Namen”であり、「名、名前、名称、呼称、名声」等の訳語がある。「…目録」という場合、著者名目録、書名目録のように、検索のためのキーとなる語を冠するのが一般的なもので、「アルファベット順に排列された著者名目録」と解釈されるが、この目録の場合、「名称」は排列語 (Ordnungswort) の一つであり、人名に限らず、書名中のキーワード (普通名詞や形容詞をも) も含まれるので、「著者名」でなく、あえて「名称」という訳語を使用している。

- 2) タイトル写票 (Titel-Kopien)

1冊の図書の「書誌情報」を全て1枚のデータシート (八つ折り版) に記入したもの。2.1.1にある通り、1枚の用紙に2本の垂直の線と、それを横断する1本の水平の線で6個のスペースを作る。第1のスペースに整理番号、第2のスペースに主題名、第3のスペースに版型、第4のスペースに排列語、第5のスペースに書名、第6のスペースに印刷地、印刷者、または発行者、および発行年等の出版事項ならびに注記を記入したもの。後年の図書基本記入目録カードの原型である。付録図版B—Mを参照。

- 3) 主題名 (Inschrift)

書架の標題、見出し。図書を排架するために主題別に仕分け、それぞれ棚に標題を付けている。シュレッティンガーは、採用していた12分

類をさらに展開し、200区分まで広げていたとされるが、現在用いられている十進分類法(NDC)の主網表が100区分なので、恐らく、その倍ほどの主題別に図書を排架したと推量される。排架方法は、主題別に図書を集め、その版型別に、フォリオ版は下段部に、クヴァルト版は中段部に、オクタヴォ版、および、さらに小型のものは上段部に排架し、それぞれの中は受入番号(整理番号)順に排列される。

4) 件名目録 (Real-Kataloge)

“Real-Katalog”は、独和大辞典(小学館)では、「分類目録」「件名目録」の訳語があり、Sauppe編“Dictionary of Librarianship, 1988. (Saur)”では、“classified catalog”(分類目録)となっている。「分類目録」を否定していたシュレッティンガーであれば、やはり「件名目録」であろうが、件名標目表を備えた現代の「件名目録」とは異なるものである。Sauppeの辞典で“subject catalog”(件名目録)を引くと“Schlagwort Katalog”とあり、「事項目録」「キーワード索引」に近いものと推量される。

5) 専門目録 (Spezial-Kataloge)

現在の「主題書誌」の前身と言えるであろう。シュレッティンガーは、「その学問あるいは主題にかんする現存のすべての文献を一緒に見ることができる目録」「この目録によって学者は自分の専門分野、関心分野の文献を一覧することができる」とし、図書のみならず、雑誌記事や論集に収録された論文なども分出記入できている。目録の排列は、当該図書館の受入れ順であり、概ね資料の発行年に近い。「小さな図書館なら12種程度の専門目録があれば十分であり、大図書館では、各学問のうち、蔵書が書架1つに納まる程度の専門分野を単位として専門目録を作ればよい。」としている。目録の記入様式は、左から順に、主題名、版型、整理番号(および合冊本中の順位)、タイトル、印刷地、印刷年である。付録図版O(Gymnastica: 体育)、P(Gedaechtniss: 記憶(力))、Q(Salzburg: ザルツブルグ(都市名))。これらが専門目録の主題名の例である。“Spezial”の語は、シュレッティンガーは、“Special”も使用しているし、“c”と“k”も混同して使用している。“Katalog”は、“Kataloge”と複数形を使用している場合もある。

(参照: ドイツ図書館学の遺産: 古典の世界/河井弘志著)

6) 参照 (Rueckweise)

付録図版から例を挙げれば、付録図版Dは、“Hist. Bavar.”(ヒストリア バヴァリア)。主題名が「バヴァリア史」である図書のタイトル写票であるが、第5のスペースである書名欄に、“Vid. *Geschichte*”(Geschichte [歴史]を見よ)の参照が使用されている。「歴史」には、“Historie”だけでなく、“Geschichte”も使用されている可能性があることによる。

7) 有名な印刷所

- ・Aldus——アルドゥス。Aldus Manutius (1450-1515)は、Venice(ヴェニス)の印刷家で、イタリア活字の創始者。Aldine editionアルドゥス版。小型の版が多い。古典の厳密な校訂でも有名。
- ・Elzevir——エルゼヴィル。1592-1692年のころ古典を出版したオランダの印刷・出版業者。エルゼヴィル活字体。
- ・Didot——デイドー。Francois Ambroise Didot (1730-1804)は、フランスの印刷・出版業者。corps Didot(デイドー式ポイント制)、活字のポイントを定めた。
- ・Bodoni——ボドニー。Giambattista Bodoni (1740-1813)は、イタリアの印刷業者・活字彫刻者。欧文活字書体の一つ、ボドニー体を定めた。

8) 写本 (Handschrift)

中世期、図書印刷が始まる前に、手で書かれた本をいう。手写本とも呼ばれる。(Kirchner: Lexikon des Buchwesens. 4 Bde.)

9) 写本・稿本 (MS. (Manuskript))

古代および中世に手書きで作製された全ての文書、書物、記録、書簡等をいう。印刷物ではない。(Kirchner: Lexikon des Buchwesens. 4 Bde.)

10) 付加資料 (Beibaende)

単数形は、“Beiband”。前つづり“bei”には、「付加、助力、同席」等の意味があり、本来、全集や講座ものなどの最終巻の後に追加された関連資料で、補遺、図版、索引、等の付録を意味する。最終巻と合冊製本されることもある。

11) 挿入冊子 (Beiband)

10)の「付加資料」と同じものである。元々、全集や講座の付録的なものを意味していたが、独立した無関係な小品・冊子等を管理上の都合で製本の際に挿入・追加することがあり、便宜上、挿入冊子や追加冊子と称している。これらの冊子類も独立したタイトル写票を作成され、製本の際には、それぞれに番号を記入し、上に

突き出た付箋が付けられる。

12) 整理番号順目録 (Nummern-Repertorium)

付録図版Aを参照のこと。ある主題に関する図書を集め、版型別に、フォリオ版は下段部に、クヴァルト版は中段部に、オクタヴォ版とさらに小型の図書は上段部に排架し、それぞれの中の排列は、整理番号（受入番号）の順とした書架目録の一種である。付録図版Aは、主題名が「哲学」の見出しのある書架で、オクタヴォ版（八つ折り版）の棚の排架リストである。整理番号、著者名、簡略書名の順で記入されている。

13) 連結 (Schaltbaende)

動詞“schalten”には、「接続する」という意味があり、名詞“Band”（巻）の複数形“Baende”すなわち、各巻というか、各図書の目録記入を「繋げる」という意味がある。冊子体目録では、増加図書を記入するために、書名と書名との間にスペースを取っておくことが必要悪となっているが、そのほかにも追加記入のために大型の紙を織り込んで張り付けるとか、種々の工夫がなされている。目録利用者にその追加データとの連続性を理解させる工夫を「連結」という言葉で表現している。

14) Georgi, Theophil (1707-1758)

“Allgemeines europ. Buecher Lexikon, 5 Theilen, 1742-1753.”「一般欧州書籍事典 全5巻」の編著者。出版地、出版社、出版年、版表示、版型、全紙頁数（全紙1枚は一般書籍の16ページ分）、価格、これらのデータが一覧表形式で掲載されている。3巻物の補遺版（1742-1757）も発行されている。（Kirchner：Lexikon des Buchwesens. 4 Bde.）

15) Heinsius, Wilhelm (1768-1817)

“Allgemeines Buecher Lexikon, 4 Bde. 1793-1798”「一般書籍事典 全4巻」の編者。この作品の主要な価値は、18世紀全般にわたって作製された作品を一本のアルファベット順に集めたものであること。1700-1810年の間の小説および劇の著者とタイトル中のキーワードのアルファベットの組み合わせで検索できること、とされている。（Kirchner：Lexikon des Buchwesens. 4 Bde.）

シュレットインガーは、この事典の各作品のデータの後ろに自分の館の所蔵記号を記入すれば、そのまま所蔵目録として使用できるとも言っている。

・文中の\*) \*\*) \*\*\*) の記号がある個所は、原著の脚注の部分である。関連パラグラフの終わりに挿入している。

・訳出したテキストは、Google（グーグル）によってデジタル化されたものを参照（2011-5-25）させていただいたことを付記し、お礼の辞に代えさせていただきます。

整理番号順目録 (Nummern-Repertorium)

主題名：哲学 版型：オクタヴォ版 整理番号順 (1-41)

155

付録図版A Beilage A.

Philosophia. In Octavo.

- |   |                                       |
|---|---------------------------------------|
| 1. <i>Zimmermann.</i> Einsamkeit.               | 21. <i>Herder.</i> Humanität. II.     |
| 2. <i>Weiller.</i> Ansicht. IV.                 | 22. <i>Smith.</i> Sittl. Gefühle.     |
| 3. <i>Schelling.</i> Idealismus.                | 23. <i>Bürger -</i> Bibel.            |
| 4. <i>Weber.</i> Logica.                        | 24. <i>Campe.</i> Väterl. Rath.       |
| 5. „ Metaphysica.                               | 25. <i>Kant.</i> Met. Anf. d. Naturw. |
| 6. <i>Gracian.</i> Criticon. III.               | 26. „ Anthropologie.                  |
| 7. <i>Mendelsohn.</i> Phaedon.                  | 27. „ Kritik d. pract. Vern.          |
| 8. <i>Volney.</i> Natur-Gesetz. (6)             | 28. „ „ d. rein. Vern. II.            |
| 9. <i>Schad.</i> Grundriss.                     | 29. „ „ d. Urtheilskr. II.            |
| 10. <i>Reuss.</i> Vorlesungen.                  | 30. „ Grundl. z. Met. d. Sitten.      |
| 11. <i>Gräffe.</i> Stetigkeit. (2)              | 31. „ Logik.                          |
| 12. <i>Montesquieu.</i> Oeuvres. VIII.          | 32. „ Met. d. Sitten. II.             |
| 13. <i>Volkmar.</i> Menschenrechte. (2)         | 33. „ Prolegomena.                    |
| 14. <i>Bardili.</i> Willensfreiheit.            | 34. „ Religion.                       |
| 15. <i>Hecker.</i> Moral. Vorlesungen.          | 35. „ Reinmoral. Relig.               |
| 16. <i>Nachlese</i> über Kant. Philosophie. (8) | 36. <i>Schulz.</i> Bruchstücke.       |
| 17. <i>Villaume.</i> Uebel. III.                | 37. <i>Elpixon.</i> VI.               |
| 18. <i>Bendavid.</i> Vergnügen.                 | 38. <i>Feder.</i> Pract. Philos.      |
| 19. „ Kritik d. pract. Vern.                    | 39. <i>Knigge.</i> Umgang.            |
| 20. „ „ der Urtheilskr. (8)                     | 40. „ Eigennutz.                      |
|   | 41. <i>Fichte.</i> Bestimmung. (8)    |
|   | „ Wissenschaftsl.                     |

タイトル写票 (Titel-Kopien)

156

126.	付録図版B Beilage B. <b>P</b> o e t i c a.	8°
<i>Schopper Hartmannus.</i>	Opus poeticum de admirabili fallacia et astvtia vvlpeculae Reinikes libros quatuor inaudito et plane novo more nunc primum ex idiomate Germanico--- latinitate donatos, adiectis insuper elegantissimis iconibus (42, ligno incisis) --- complectens. Cum breuissimis in margine Commentariis, --- Auctore (...o) Nouoforense Norico.	Francuforti ad Moenum. 1567. (In fine:) per Petrum Fabritium, impensis Sigismundi Feierabent et Simonis Huteri. 1567. (rar.)
385.	付録図版C Beilage C. <b>Hist. Bavar.</b>	8°
<i>Geschichte</i>	(..) von Baiern für die Jugend und das Volk. Auf Befehl Sr. kurf. D. herausgegeben von der bayerischen Akademie der Wissenschaften. 6 Bde. (in II. Bänden.) (Auctor Laurentius <i>Westenrieder.</i> )	München. Strobl. 1785.
385.	付録図版D Beilage D. <b>Hist. Bavar.</b>	8°
<i>Westenrieder Lorenz.</i>	<i>Geschichte von Baiern zc. Vid. <u>Geschichte.</u></i>	

タイトル写票 (Titel-Kopien)

167

182.	付録図版E Beilage E. Auct. Class. Gr.	8°
<i>Antoninus, Marcus,</i>	<p>Μάρκου Ἀντωνεῖνου τῶν εἰς ἑαυτὸν βιβλία IB.                      (...i) Imperatoris ac Philosophi Libri XII. eorum quae de se ipso ad seipsum scripsit ad exemplar oxoniense 1704 recusi.                      Introductionem ad Philosophiam Stoicam ex mente M. Antonini praemisit Joan. Franc. Buddeus---.                      Vitam recensvit -- Chph. Wolle---</p>	<p>Lipsiae.                      Sam. Benj. Walther.                      1729.</p>
182.	付録図版F Beilage F. Auct. Class. Gr.	8°
<i>Buddeus, Jo. Franc.</i>	<p>Introductionem ad Philosophiam Stoicam---praemisit.                      Vid. <u>Antoninus.</u></p>	
182.	付録図版G Beilage G. Auct. Class. Gr.	8°
<i>Wolle, Christoph.</i>	<p>Vitam (M. Antonini) recensuit---.                      Vid. <u>Antoninus.</u></p>	

タイトル写票 (Titel-Kopien)

158

318.	付録図版H Beilage H. G e o g r.	8°
<i>Briefe</i>	(...) eines Reisenden Franzosen durch Baiern, Pfalz und einen Theil von Schwaben an seinen Bruder zu Paris. Aus dem Französischen übersetzt.	— — 1783.
105.	付録図版I Beilage I. A e s t h.	8°
<i>Engel, J. J.</i>	Der Philosoph für die Welt. 3. Theile (in II. Bänden).	1. u. 2. Theil. Neue Ausgabe. Carlsruhe. Schmieder. 1789. 3. Theil, Berlin. Mylus. 1800. (Collectio Tractatum aesthetico- criticorum, nec non phi- losophico- poeticorum.)

タイトル写票 (Titel-Kopien)

159

34.	付録図版K Beilage K. Hist. Nat.	Fol.
<i>Baier, Jo. Jac.</i>	(...i) Oryctographia norica si- ve rerum fossilium et ad mine- rale regnum pertinentium in territorio Norimbergensi eius- que vicinia observatarum suc- cincta descriptio. Cum Supple- mentis A. 1730 editis.	Norimber- gae. Wolffg. Schwarzkopf. 1758. (Cum 16 Ta- bulis aeri incisis.)
<u>124.</u> 1.	付録図版L Beilage L. A e s t h.	8°
<i>Koller, J.</i>	Entwurf zur Geschichte und Li- teratur der Aesthetik, von Baum- garten bis auf die neueste Zeit. Herausgegeben von (...).	Regensburg. Montag und 17...
<u>124.</u> 2.	付録図版M Beilage M. A e s t h.	8°
<i>Kritik</i>	(...) der äußerlichen Beredsamkeit, mit Beispielen belegt, für ange- hende Prediger --- von G. R.	Erfeld. Comptoir für Literatur. 1800.



アルファベット順名称目録 (alphabetischen Namen-Kataloge)  
 排列語／書名 (簡略)／出版事項／版型／主題名・整理番号

160

付録図版N Beilage N.

A.				
<i>Aaron</i>	(..)redivivus, seu ap- plausus Musicus Ignatio Abbati Nideraltacensi ad Festum Electionis oblatus . . . . .	— — 1760.	4°	Poet. 58.
<i>Abaris</i>	Dr.(..)finale Vernunft- kritik für das grade Herz, zum Commentar M. Zwanzigers über Kants Kritik der prak- tischen Vernunft-. . . . .	Nürnberg. Schneider. 1796.	8°	Philos. 825.

アルファベット順名称目録 (alphabetischen Namen-Kataloge)

排列語／書名 (簡略)／出版事項／版型／主題名・整理番号

161

<p><i>Abbadie,</i> E. E.</p>	<p>(...) Naturgeschichte für Kinder. Mit Kupfern .</p>	<p>Stttingen Brose. 1801.</p>	<p>8°</p>	<p>Hist. Nat. 413.</p>
<p><i>Abbadie,</i> Jacques.</p>	<p>L'Art de se connoître soy-même, ou la Re- cherche des sources de la Morale . . . . .</p>	<p>Rotterdam. Van der Hart. 1692.</p>	<p>8°</p>	<p>Philos. 255.</p>

11

専門目録 (Spezial-Kataloge)

162

付録図版〇 Beilage O.

Special-Katalog über die Gymnastik.

Fach	Format	Nr.	Gymnastica.	Druckort.	Jahrz.
Gymn.	Fol.	1	(---) Contrafactur und Formen der Gebiß, --- auch vnderrichtungen der pferdt--- Durch Hansen Kreuzberger . .	Wien	1591
—	—	1/1	Künstlicher Bericht --- Friderici Grisonis --- Wie die Streitbarn pferdt --- geschickt vnd vollkommen zu machen . . . . .	Augsb.	1580
—	—	2	--- Contrafactur und Formen der Gebiß, --- Durch Hansen Kreuzberger --- . . . . .	o. D.	1562
—	—	3	Anti-Maquignonage --- (Alio titulo) La perfezione e i difeti del Cavallo, opera del Barone d'Eisenberg --- .	Firenze.	1753
—	(obl.)	4	L'art de monter à cheval, --- par le Baron d'Eisenberg --- .	Amst. etc	1759
—	Fol.	5	De lo Schermo overo Scienza d'Arme, di Salvator Fabris ---	Copenh.	1606
—	—	6	Des --- Salvatoris Fabri Italicänische Fechtkunst --- . . . . .	o. D.	o. J.
—	—	7	Cavallo frenato di Pirro Antonio Ferraro --- . . . . .	Napoli.	1602
—	—	8	Daselbe . . . . .	Venetia.	1653
—	—	9	Zwei --- Bücher von Stangen vnd Mundstücken, --- das erst durch Johann von Fiorentini ---, das ander durch Georg Engelhart & Neysen --- . . . . .	Griff. a. D.	1609
—	—	10	Il Cavallo del Maneggio del Sign. Giouan bat. Galiberti . .	Vienna.	1650
—	—	11	Ein Ritterlich vnd Adelic Kunstbuch: --- Durch --- Johann Weisfert --- . . . . .	Roburg.	1615
—	—	12	Künstlicher Bericht --- Fried. Grisonis --- Wie die Streitbarn Pferdt --- geschickt vnd vollkommen zu machen --- . . . . .	Augsb.	1573
—	—	13	Daselbe . . . . .	—	1570

専門目録 (Spezial-Kataloge)

163

Fach	Format	Nr.	Gymnastica.	Druckort.	Jahrz.
Gymn.	Fol.	14	Künstlicher Bericht--- Fried. Grisonis--- Wie die Streitbarn Pferd--- geschicht vnd vollkommen zu machen --- . . . . .	Kugsp.	1599
—	—	16	Dasselbe . . . . .	—	1608
—	—	17	Des --- Frid. Grisonis Reap. Künstliche Beschreibung--- Die Pferd--- vollkommen zu machen	—	1566
—	—	19	Von der Kunst der Reiterrey--- Durch Hans Friedrich Hertzwart von Hohenburg --- . . . . .	Legernsee	1577
—	—	21	Dasselbe . . . . .	—	1578
—	—	22	Dasselbe . . . . .	—	1580
—	—	23	Dasselbe . . . . .	—	1581
—	—	24	Reuer Discours Von der--- Kunst des sechtens--- Joach. Köppen --- . . . . .	Magdeb.	1625
—	—	25	Le Cavalerie françois. Composé Par Sal. De La Brove ---	Paris	1610
—	—	26	Dasselbe . . . . .	—	1617
—	—	27	Dasselbe . . . . .	—	1620
—	—	15	La Cavalerie françoise et italienne--- par Pierre de La Nove . . . . .	Strasb.	1620
—	—	28	Pratica et arte di Cavalleria. Übung und Kunst des Reiters,--- Durch Christoff Jakob Lieb ---	Dresden	1616
—	—	28 1	Gebisbuch--- Durch Christoff Jakob Lieb ---	—	—
—	—	29	Della Cavalleria. D. i. Gründlicher--- Bericht--- Durch Georg Engelhard Eshneys . . . . .	Reml.	1624
—	—	30	Georg Engelh. v. Eshneisen--- Neu' eröffnete Hof= Kriegs= und Reit= Schul, --- vor die Augen gestellt von Valentin Trichter --- . . . . .	Kölnb.	1729
—	—	31	Von Zeumen. Gründlicher Bericht --- (Von G. C. Eshneysen) . . . . .	o. D.	1588
—	—	32	Le véritable parfait Marchal. Der wahrhaftig = vollkommene Stallmeister. (Von J. H. Widerhold) . . . . .	o. D.	o. J.

Fach	Format	Nr.	Gymnastica.	Druckort.	Jahrz.
Paed.	8°	164	Gymnastik für die Jugend, --- von G. F. Guts-Muths ---	Schnepf.	1804
—	—	275	Turnziel. Turnfreunden und Turn- feinden von Dr. Franz Passow	Breslau	1818
—	—	346	Turnziel. Sendschreiben an den Herrn Prof. Kayser und die Turnfreunde. Von Heinrich Stef- fens . . . . .	—	—

件名目録 (Real-Kataloge) 付録図版 P Beilage P.

G e d ä c h t n i s s .

<i>Beyträge</i>	Pfalzbater. (...) zur Belehrf. B. II. 1782. (S. 80) „Von der „Stärkung des Gedächtnisses, „aus Knox's Englischem“ . . .	Bav.	365	8°
<i>La Mothe le Vayer (Fr. de)</i>	Oeuvres. Paris 1656. T. II. (p. 574). „De la Memoire“ . .	Opp.	113	8°
<i>Clerici (Dav.)</i>	Orationes etc. Amst. 1687. (p. 144) „Laus Memoriae“ . . . . .	—	49	8°
<i>Grataroli (Guil.)</i>	Opuscula. Lugd. 1558 (p. 1) „De „Memoria reparanda, an- „genda, conservandaque, ---“	—	78	—
<i>Sanctii (Franc.)</i>	Opera. Genevae 1766. T. I. (p. 369). „Artificiosae Memo- „riae ars“ . . . . .	—	151	—
<i>Belot (Jean)</i>	Oeuvres. Rouen 1688. (p. 836) „De la Memoire artificielle, „ou l'Art de Raimond Lulle“	—	236	—
<i>Maury</i>	Esprit etc. de l'Abbe (...) Paris 1791 (p. 263) „Mémoire“ . .	—	331	—
<i>Meilhan (de)</i>	Oeuvres. Hamb. 1795. T. I. (p. 13) „De la Mémoire“ . .	—	332	—
<i>Montaigne (Mich. de)</i>	Essais. Londres. 1745. T. I. (p. 58) „Des menteurs“ . .	—	350	—
—	Gedanken. 2c. B. I. Berlin 1793. (S. 56) „Von Sägern“ . .	—	351	—
<i>Trublet</i>	Versuche --- Berlin 1765. Sp. I. (S. 202) „Von dem Lesen und „dem Gedächtnisse“ . . . . .	—	417	—

件名目録 (Real-Kataloge)

176

G e d ä c h t n i s s .				
<i>Gundlingiana</i>	St. XXXI. Halle 1723 (S. 91)			
<i>Michaelis (J. D.)</i>	„Was man Gedächtniß nenne?“ Bermischte Schriften. Th. I. Heft 1766 (S. 1) „Zerstreute Anmerkungen über das Gedächtniß“	Opp.	482	8°
<i>Unzer (J. A.)</i>	Sammlung kleiner Schriften II. Hamb. u. L. 1766. (S. 412)			
	„Untersuchung, ob und wie die „Bergeßlichkeit zu beförbern sey“	—	537	—
<i>Nasse(Fried.)</i>	Zeitschrift f. d. Anthropol. 1824 Heft I. (S. 243) „Beobachtungen über die Beziehung des Gedächtnisses zum Gehirn; von Dr. J. C. Prichard“	Anthr.	99	—
<i>Alembert(D)</i>	Esprit --- de (...) Genève 1789. (p. 304) „Memoire“	Opp.	207	—
<i>Ségur (De)</i>	Oeuvres-compl. T. XXVII. Paris 1826. (p. 163) „De la Mémoire“	—	404	—
<i>Billy (De)</i>	Nouveau Traité de la Mémoire. ---	Ph. sp.	96	—
<i>Minck(Stan.)</i>	Logica memorativa peripatetica --- 1725	—	584	—
<i>Winckelmann (J. J.)</i>	Caesarologia --- varrii aenigmaticis aeri incisus Memoriarumque mirè juvantibus Figuris illustrata	Germ.g.	534	—
<i>Bruxii (Ad.)</i>	Simonides redivivus, sive Ars Memoriae et oblivionis. --- tabulis expressa --- Cui accessit Nomenclator mnemonicus ---	Paed.	6	4°
<i>Mink(Stan.)</i>	Relatio novissima ex Parnasso de Arte Reminiscendae. D. i. Neue wahrhafte Zeitung --- 1618	—	6(1)	—
<i>Herseler (Ern.)</i>	Memoriae artificiosae concentratae Decalogus ---	—	6(2)	—
<i>Clüveri (Dethl.)</i>	Vindiciae Artis Mnemonicae --- 1705	—	7	—
<i>Döbelii (J. H.)</i>	Collegium Mnemonicum, Obergang neu eröfnete Geheimnisse der Gedächtniß-Kunst --- 1707	—	8	—
<i>Leporei (Guil.)</i>	Ars Memorativa 1520	—	16	—

件名目録 (Real-Kataloge)

189

		付録図版Q Beilage Q.		
S a l z b u r g.				
V. BAYERN. V. HALLEIN. V. LAVANT. V. KIRCHEN- VERSAMMLUNG.				
<i>Abhandlung</i>	Unparteyische (...) von dem Staate --- Salzburg ---	Bav.	1	2°
<i>Dalham</i>	Concilia Salisb. --- atque de Ortu Hierarchiae hujus ---	—	174	—
<i>Gratulatio</i>	panegy. quam --- Guidobaldo ex Comit. de Thun --- Archiep. Salisb. --- dixerunt Musae Salisb. . . . .	—	382	—
<i>Hund</i>	Metropolis Salisburgensis, ---	—	433	—
<i>Joachimus</i>	Heilige Fürsten-Bahl. (den 12. Martii 1763.) . . . . .	—	462	—
<i>Ibstenzis</i>	Gladius Justitiae seu Sententia definitiva S. Rotae Romanae --- super Praetensione Episcopatus Chiemensis in Civitate Salisburgensi ---	—	544	—
<i>Lohrer</i>	und Beleuchtung der Gründe, aus welchen sich die Erzstift. Salzbg. Lande --- von dem kurfürz. Reichs-Bischofs-Sprengel haben ausscheiden wollen. ---	—	515	—
<i>Nachricht</i>	Academica --- Universitatis Praesidi --- (et Assistentibus) --- cum in triennialibus Comitibus Universitatis Salisb. solenni ritu renunciarentur, --- dicta. 1688 . . . . .	—	754	—
<i>Salutatio</i>	Provincialia. (de anno 1490.)	—	804	—
<i>Statuta</i>	Alma Mater Salisburgensis --- in Filias Seccoviensem et Lavantinam --- datis novis --- Sponsis feliciter benefica. ---	—	926	—
<i>Woller</i>	Execution des Erzstiftes Salzburg vom Reichsvicariatsgerichte .	—	951	4°
<i>Hempel-Kürsing.</i> (J.N.v.)	Catalogus Antistitum --- omnium, qui Ecclesiae --- Salisburgensi --- praefuerunt: . . . . .	—	965	—
<i>Hess</i> (J. Dom.)				

件名目録 (Real-Kataloge)

183

S a l z b u r g.			
<i>Danreiter</i> (F. A.) ( <i>Koch-Sternfeld</i> )	Die Garten Prospect von Hellbrunn. ---	Austr.	94(1) 2°
<i>Abdruck</i>	Salzburg, die Stadt und ihre nächste Umgegend unter der Herrschaft der Römer. --- (Mit einer topogr. Karte.)	—	301 8°
<i>Nachrichten</i>	des gnäd. Dekrets, welches Se. Hochfürstl. Gn. (Hieronymus) bey Gelegenheit der --- Jubelfeyer des 12. Jahrhunderts, --- 1782 ausgefertigt haben	Germ.sp	73 2°
	vom Zustande der Gegenden und Stadt Subavia --- bis zur Ankunft des heil. Ruperts und von dessen Verwandlung in das heutige Salzburg	—	112 —
<i>Braune</i> (F. A. v.)	Salzburg und Berchtesgaden Ein Taschenbuch für Reisende und Naturfreunde. Mit zwey Tafeln. 1821	—	70 8°
<i>Ehrendenkmal</i>	Ruhmvolles (...) für die Bürgerschaft der --- Stadt Salzburg wegen des von ihr während des Aufenthaltes der Franzosen geleisteten Wachendienstes 1801.	—	124 —
<i>Geographie</i>	von Salzburg zum Gebrauche in unsern Schulen. 1796	—	159 —
<i>Hueber</i> (Jos. Ben.)	Topographische Beschr. der Landschaft Lungau im Fürstenthum Salzburg. Mit einer Kupfertaf.	—	227 —
<i>Beschreibung</i>	Topogr.-historische (...) des Oberpinzgaus im Erzstifte Salzburg. Mit einer Kupfertafel. 1736	—	227 —
<i>Hübner</i> (L.)	Beschr. des Erzstiftes u. Reichsfürstenthums Salzburg --- 1796.	—	(1) 228 —
— —	Beschr. der --- Residenzstadt Salzburg und ihrer Gegenden verbunden mit ihrer ältesten Geschichte. (Mit Kupfern.)	—	229 —
<i>Calender</i>	Hochfürstlich Salzburgischer Kirchen- und Hof- (...). (Mit Porträts und Wappen.)	—	252 —
<i>Koch</i> (Jos. Ernst v.)	Historisch-geogr. Repertorium über die unpartheyische Abhandlung vom Staate Salzburg. 1802.	—	255 —



件名目録 (Real-Kataloge)

184

S a l z b u r g.				
<i>Nachrichten</i>	über das Erzstift Salzburg nach der Säkularisation, in vertrauten Briefen ---- 1805 . . . .	Germ.sp	337	8°
<i>Reisigl(F.A.)</i>	Unpartheyische Gedanken über die Forstwirthschaft im Fürstenthume Salzburg; ---- 1791 . . . .	—	369	—
— —	Ueber den Straßenbau im Fürstenthume Salzburg . . . .	—	370	—
<i>Rumpler (M.)</i>	Geschichte von Salzburg. Ein Reisebuch fürs Volk. ---- 1803 . . . .	—	393	—
<i>Weilmeyr (F. X.)</i>	Salzburg --- Ein Hand- und Adreßbuch für Jedermann ---- 1813 . . . .	—	516	—
<i>Zauner (Jud. Thadd.)</i>	Beiträge zur Geschichte des Aufenthaltes der Franzosen im Salzburgischen --- 1801 . . . .	—	540	—
— —	Chronik von Salzburg. 1756 . . . .	—	541	—
— —	Sammlung der wichtigsten, die Staatsverfassung des Erzstifts Salzburg betreffenden Urkunden	—	542	—
<i>Zezi(J.Bern.)</i>	Kurfürstlich-Salzburgischer Hof- und Staatschematismus ---- . . . .	—	543	—
<i>Vierthaler (F. M.)</i>	Geschichte des Schulwesens und der Cultur in Salzburg. 1804.	Paed.	375	—
付録図版R Beilage R.				
T a u b s t u m m e.				
<i>Intelligenzblatt</i>	Churbair. (...) 1771. Nr. 22 (S. 283) „Zu Paris hat der „Abbe Delepée --- eine neue „Schule für Taube und Stumme errichtet“ . . . .	Bav.	3021	4°
— —	„ „ 1776. N. 21 (S. 192) „Hamburg. Der Kantor Heinicke in Cppendorf ---“ . . . .	—	—	—
— —	„ „ N. 48 (S. 428) „Ueber den Unterricht der Taub- und Stummgeborenen“ . . . .	—	—	—
— —	„ „ 1780. N. 28 (S. 274) „Nicht leicht trägt ein Institut das Gepräge der edelsten Wohlthätigkeit ---“ . . . .	—	—	—

件名目録 (Real-Kataloge)

185

T a u b s t u m m e .			
<i>Intelligenzblatt</i>	Churbaiet 1782. N. 24 (S. 228) „Obforge der Polizen und er- „neuerte Bedingungen des Churf. „fäcf. Instituts für Stumme „in Leipzig“ . . . . .	Bav.	3021 4°
— —	„ „ N. 28 (S. 270) „Wie „Stumme reden lernen können, „von Herrn von Haller“ . . . . .	—	— —
— —	„ „ 1799. N. 26 (S. 429) „Nützliche Anstalten. Ueber Taub- „stumme“ . . . . .	—	— —
— —	„ „ 1801. N. 45 (S. 703) „Verord. 2. Die Anzeige der „im Lande befindl. Taubstum- „men betr.“ . . . . .	—	— —
<i>Seida u. Dingler</i>	Aug. L. b. Vaterlandskunde. Jahr- gang I. Sept. (S. 631) „Noti- „zen“ . . . . .	—	2443 8°
<i>Neeb (J.)</i>	Bermischte Schriften. Thl. II. Heft 1817. (S. 128) „Bemerkungen „über den Einfluß der Sprache „der Taubstummen auf ihre „Sitten und ihr Erkenntniß- „vermögen“ . . . . .	Opp.	542 —
<i>Wolke (C.H.)</i>	Nachricht von den zu Tever durch die Galvani-Voltaische Geheir- Gebe-Kunst beglückten Taub- stummen . . . . .	Phys.,sp.	751 —
<i>Bond (W.)</i>	Der übernatürliche Philosoph, -- D. Wallis Methode, Taube und Stumme lesen, schreiben und jede Sprache verstehen zu lernen. X. d. Engl. . . . .	Phys.,m.	26 —
<i>Deusingii (Ant.)</i>	Fasciculus Diss. select. Gronin- gae. 1660. (p. 147) „De Sur- dis ab ortu, Mutisque, ---“ . . . . .	—	45 —
<i>Andres (Giov.)</i>	Dell' origine e delle vicende dell' arte d'insegnar à parla- re ai Sordi Muti, Lettera dell' Abate D. (...) 1793 . . . . .	Paed.	1 4°
<i>Lehrart</i>	Welches ist die eigentliche den Taubstummen nützlichste (...) ? --1794 . . . . .	—	15 —
<i>Weinberger (J. M.)</i>	Versuch über eine allgemein an- wendbare Mimik in Beziehung		

13